日商岩井大阪総務部に深謝申し上げる。

＊ 昭和五十七年六月十六日受理

The First Japanese Student of Chemical Engineering in the U.S.

＊＊ Fumitake Yoshida

〔略歴〕 大正二年生。昭和十二年京大・工・工業化学科卒。日立製作所勤務の後、二十一年京大助教授、二十六年同教授、五十一年同名誉教授。この間三十八年カリフォルニア大、四十五年ペンシルバニア大各客員教授、五十四年全米工学アカデミー国外客員、工学博士。

趣味・写真、ハイキング。

今田絢子絵（本号表紙の作者）

「震災と鈴木商店

柳田義一

若い頃、鈴木商店の金子直吉の私設秘書みたいなことをやっていました。例の本店焼き打ちの時、米の買い占めの張本人みたいに言われましてね。流言飛語の恐ろしさをいやというほど味わいました。

全くのぬれぎぬですよ。ある新聞社が「下関で不足している外米を外国へ輸出しようとしている。この非常時になんたる悪徳商人」と書きたてたんです。事実は、米不足を憂慮した金子さんが、商売を度外視して輸入しろと指令して、朝鮮米を大量に買い付けたのですよ。新聞記事とは全く逆の行為だったんですが、大衆にわかってもらえなかった。

震災の時、金子さんと川崎造船の松方さんが真っ先に救援船を東京へ送ったのも、あの事件が心にしみていたんでしょうね。いわゆる大戦後の慢性不況で金融のやりくりに四苦八苦していた頃です。しかし企業は社会的責任を負っている。そんな気概が二人にありましたね。もちろん荷主である金子、松方に気っぷで応えた上組も立派だったと思います。

残念ながら鈴木はその後倒産するわけですが、明治、大正の経営者にあったのは「気骨」です。金子さんは人を育て、事業を残したけれど財産はゼロ。住居も終生借家でした。「国のためなら私を殺して働く」というむちゃに映る拡大路線に対して社員がみんなついていったのも、そんな金子哲学があったからこそでしょう。

村尾市松氏（上組元頭取）とは直接交渉はなかったけれど、明治男としての共通した魂があったように思います。

（太陽鉱工顧問・談）

徳末社長奮戦

帝人 大屋後遺症乗りこえる

□1□

大野 誠治（雑誌「財界」編集長）

徳末知夫社長

〈とくすえ・ともお〉大正3年8月22日生まれ。昭和13年神戸商大卒、同年帝人入社。企画部長、ニューヨーク出張所長を経て40年取締役に就任。44年常務、47年専務、49年副社長。55年3月9日に死去した故大屋晋三前社長の後を受け、同年4月社長に。いらいポスト大屋の帝人再建に全力をあげている。

帝人社長に意外な力

「骸骨を乞う」で難関を突破

不況時、辞表叩きつけ

超ワンマンにダメ

"ワシャ百歳までも社長をやるぞ"と叫び続けていた超ワンマンの大屋晋三・帝人社長が亡くなってから、はや一年半。大屋氏の診断では、「帝人にはロクな奴はいない」ということになっていたが、なかなかどうして、むしろ業績的には、"大屋時代"をしのぐものがある。その立役者が「ばからずも…」社長になった徳末知夫氏である。帝人をここまで甦らせた徳末社長の"意外な力"は―。

"骸骨を乞う"―帝人の徳末知夫社長は最近、なにか困難な問題にぶつかると、この言葉を想い出し、再び、猛然とファイトが湧いてくるという。この言葉の意味は、「広辞苑」によると、「漢籍疏広『即日乞骸骨』」辞職をねがう」―となっている。

徳末社長は、笑いながら、こう説明している。

「中学の漢文で習ったんですよ。天子に向かって、大臣が言う言葉ですがね…」

いまでこそ、徳末社長は、この言葉をある時、使ったことを、笑いながら説明するが、徳末氏がこの言葉を使った時は、非常に大変な時で、もし、この言葉の通りになっていたら徳末氏の今日はなかった。また、今日の、活気ある帝人もなかったと言っていい。

昭和五十二年から五十三年にかけて、合繊業界は、未曽有の不況になった。この時、徳末氏が"骸骨を乞う"という言葉をつかったのである。即ち、徳末氏が超ワンマンの大屋晋三社長（当時）に、辞表を叩きつけたということだ。

この時、東レ、帝人などの合繊各社は、大幅赤字に苦しみ、いっせいに、新規採用のストップや希望退職などの人員削減等をとった。帝人は六千人から七千人の人員整理（子会社への出向も含む）をやったので、当然のごとく、社長に対する経営責任の問題がでてきたのである。

事実、当時筆頭副社長だった渡辺清市郎氏、人事担当副社長だった原彊氏も辞表を提出して、副社長から単なる取締役に、五十三年六月に降格している。徳末氏も、この時に、辞表を提出したのだが、それを"骸骨に乞う"と書いたのである。

これに対して、大屋氏は、「まだ六十五歳になっていないではないか。若いから、もう少し辛抱せい。副社長がいやなら、子会社の社長か会長はどうか」と言ったという。だから徳末氏は、「子会社のポストがあるのなら、自分より若い人を、そういうポストにつけて下さい。とにかく、私はここで辞めさせて欲しい」と頼んだ。

ところが、大屋氏はいずれも許さず、しばらく徳末氏の辞表に自分の名前をサインして、とにかく「もうちょっとおれ」と言い、辞表を返したという。この辞表騒動の時に、徳末氏は大屋政子夫人から、「貴方は、ずいぶんむずかしい言葉を知っとるね」と言われたそうである。

いってみれば、徳末氏に対する大屋氏の言葉に、徳末氏が反論したことであった。当時は、大屋ワンマンの言うことには、誰も異議をはさまず、大屋氏の独演会で終わることになっていた。ある時、大屋氏が「いまの役員は、役員をやめさせられたら、みんな食っていけなくなるだろう」と毒舌をはいたという。

ほとんどの役員は、下を向いて黙っていたそうだが、徳末氏だけは、「そんなことはありません」と猛然と反論した。ワンマン政権下でも、気骨があったというべきだが、こういうことがあったために、大屋氏としては、徳末氏をやめさせるわけには、いかなかったのだ。即ち、徳末氏は、「私も辞める代わりに、大屋さんも早く社長を辞めて、会長になりなさい」という気持ちを持っていたのだ。従業員に大量にやめて貰ったのに、社長がのほほんと居座っているのは、経営上、おかしいと当時の副社長は全員考え、"社長が辞めないのなら、私らが辞めます。そうしないと経営責任があいまいになる"と、辞表を出したのである。

これだけの伏線があったからこそ、大屋氏は、六十五歳という年齢を持ちだし、気どった副社長たちはやめてもらったというわけである。本来、大屋氏がこの時に会長になっていれば、よかったのだが…。

それはともかく、徳末知夫という男は、超ワンマンの政権下でも、必要な時には、必ずクサビを打つことを忘れない。シンがしっかりしていると同時に、気骨を持っていたといえよう。

故大屋晋三前社長

大屋政子さん